加茂里山通信（かもさとやまつうしん）
平成24年秋号
発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部
発行責任者・編集長
征矢　貫造

地に花を咲かそう

あわや台風が直撃かと思われた週末でしたが、なんとかそれて青空の見えた9月29日に「花プロジェクト2012」が実施されました。多くの団体や個人が参加して、佐是から養老渓谷までの区間の小湊鉄道沿線に菜の花の種蒔きを行いました。それぞれの駅や鉄道沿線にはその地域で活躍する地元の団体が関わり、小学生や中学生も参加した一大イベントとなりました。

その中の一つ高滝駅では高滝小の子供たちと高滝地区の加茂中の生徒たち、それに父兄や先生たちと養老東朋会のメンバー、あわせて30名くらいで種蒔きを行いました。集合してまず市役所の方からその日の日程の説明がありました。次に東朋会の高滝駅前美化推進本部長から具体的な種蒔きの説明を受けて、かなり広めの範囲を手分けして作業にとりかかりました。駅ホームの反対側の綴脇脇は雑切りから踏切迄の長い範囲となり、ちかくの休耕田と空き地も広さがありましたが、小学生が綴脇脇を中学生が休耕田と空き地を作業分担しました。

草地や蛇などの出現も考えられるので長靴をと事前にお願いしてあったのですが、子供たちのほとんどは白っぽいズックでした。そのことが少し気になりましたが、底に穴の空いたペットボトルを振って種を蒔いていきました。中には両手に持ってシェイクしているように種まきをしている子もいました。少しまばらになるように蒔いてくださいとの事前説明があったにもかかわらず、いきなりキャップをとって振り始めた大人がいたりしましたが、子供たち結構楽しく蒔いてくれました。

小一時間経った頃、近くの魚屋さんが提供してくれたおそらく今年最後のスイカをみんなで食べて終りました。その後列車に乗って足湯とカレーの用意されている養老渓谷へと向いました。

桜と菜の花が一緒に開化する頃、自分たちが参加したこの種蒔きの成果を子供たちはどのような思いで見ることでしょう。

ところで、この種まきの種を用意し、渓谷の駅でカレーの準備をしているボランティアの人たちの活躍を忘れるわけにはいきません。カレーなどは前日から仕込まなければならず、その量たるやものすごいものであるはずです。こうした人たちの知れない苦労がこのプロジェクトを支えていることに目を向けなければいけないと思います。裏方の人間たちの無償の奉仕が地に花を咲かす原動力になっています。

満開の菜の花がこの地を包む頃、その苦労は報われることと思います。

（征矢里山通信員）

お母さんたちや小さな子も参加

作業の後のスイカはうまい！

中学生も地元で大活躍！

富山小学校 最後の運動会

加茂地区小学校最後の運動会。今年のテーマは『限界をこえろ！！富山っ子！！』

小学校のトラックは通常は、何のんだろうか？富山っ子の運動会は、全学年、一般、老人会、子ども会と朝からずっーと競技をしている。リレーでは人数の問題でトラックを一周走る子もいる。富山っ子のパワーは、ここから来るのかもしれない。今回は最後の運動会という事もあって、卒業生や元富山っ子だった先輩方やその子ども達、近隣の仲間達の参戦もあって、盛大なものになった。来年の一年生は2名だが、子ども会のパン食い競争は最後の晩餐とばかりに大勢の子ども達の走りが見られた。そして午前の最後の炭焼き音頭も復刻版としての炭焼き音頭が行われた。次はどの場面で見る事ができるだろうか？そんなギャラリーの多い中で、町会対抗縄ないリレーが行われた。富山っ子チーム（5町会（上、下貝殻谷、新井、吉沢、小谷田）で競われるこの時期ならではの競技だ。稲刈りが終わった後の稲を使っての競技。この競技の起源としては、そんなに昔からものではない。里山のメンバーと歴代の校長先生との他愛の無い会話の中から生まれた特殊な競技だった。それから数年（4，5年）で富山っ子たちも縄をなうことが上手になった。今年の競技は蕃狂わせがあった。吉沢のメンバーで超高速で作業をする方が現れ、優勝をさらっていった。この競技だけはこの時期でなければ出来ない。ギャラリーも熱く燃える。最後となってしまうのは本当にさびしいばかりだ。富山小よ、永遠に！

（矢代里山通信員）

これが噂の縄ないリレーか

万国旗と赤白の帽子　まさに運動会

地域のみんなが参加しています

めくるめく加茂べべ語ーるど ファイトはいつから一発？

「ちょっとそっちおっぺしてくれよ」
「あーにーよー？」
「だからちょっとおっぺしてくれって」
「おっぺす？オレまたふっちゃげっかと思ったよ」
「ふっちゃげるのは後。まず先におっぺしてくれって」
「こんなものでいいか？」
「こんなものかな？ちょっとちげえみてえだけん」
「ああんがこんなもんだっぺ」
「じゃ今度は縁ふっちゃげて」
「ああんかおかてな。相当あっどこりゃ」
「そりゃそうだっぺ。鉄んかたまりだかんな」
「よし、じゃ、ふっちゃげっから位置決めてくれよ」
「わかった。よしそのへんでちょっと押さえて」
「はやくしろよ」
「だからそのままって。振るわすなって」
「振るわしてる訳じゃなくって、手がぶるぶるしてんだか自ずしてくれさ」
「わかった、わかったからそんなまま」
「だから、そんなままじゃねえって」
「よし、いいぞ」
「いいぞじゃねえよ、早くしてくれよ」
「じゃとりあえず止めっから」
「あんだかいいもんもってんでん」
「これかっ？こんくれい持ってねっと仕事になんねえべえ」
「なかなか言っねえ」
「あーに、たいしたことあねえよ」
「よしじゃあ次やっか」
「こん足盥こんまんまでいいか？」
「すこ切んねっぱいけねっぺ」
「そおらくんに切んのがあっぺ」
「これか？グラインダーでっかしたみていなやっか」
「気をつけねっと足なんか一発だかんな」
「これも一発か？ファイトも一発なんだよな」
「じゃ何か、ファイトは1個か？迫力ねっぺ」
「だいたいファイトって数えるもんなのか？」
「そんなこたあ知らねえよ。だけんがとりあえずリボビタンはファイト一発だかんな」
「ファイトって言葉が出ると一発ってゆっちゃうもんな」
「そうだよな。条件反射だよな」
「条件反射？ええこと知ってんでん」
「じゃ、パブロフの犬は？」
「あにそれ？」
「食べ物の絵見せっとよだれ垂らす犬がいっだよ」
「何度も何度も実験して絵見せただけでよだれ垂らすんだよ」
「音聞いただけでよだれ垂らしてんのはどうすんだ？玄関の戸開けたとたんすっとんできて気を付けん姿勢でハアハアハアよだれ垂らしてん犬がいっぞ」
「どこん犬だよ、それ」
「こおらんまし犬はだいたいそんなもんだよ」
「そんなもんかい？」
「ああそんなもんだよ、人間だってちょっと音聞いただけでよだれ垂らしてんのがいっぺ」
「誰んことだよ、その犬でいな奴は」
「おめえだよ、缶ビールのプシュって音きくとたまんねっぺ」
「確かに言えんな。たまんねなあれ」
「じゃ、音聞くか」
「そうすっか」
「って訳に行かねえだろうよ。今日中にやっつけちゃあねっきゃいけねんだかん」
「じゃ、うんならかしてやんねっきゃいけねっぺ」

（征矢里山通信員）

魚屋の戯言

鰈の美味しい季節になりました

鰈（かれい）は種類が多い魚でそれぞれの旬を特定するのは案外難しく、マコガレイやイシガレイなどは夏のほうが美味しいという向きもいらっしゃいますが、総じて冬場においしくなる鰈が多いように思います。ごくごく大雑把に区別すると、切り身にする大型の鰈は冬、一尾付けでお出しする小型のものは夏に旬を迎えると考えるのも一つの方法です。

マコカレイと言えば、真っ先に思い出す鰈が城下かれい（しろしたかれい）です。「海中に真清水湧きて魚育つ」これは俳人・高浜虚子が大分県の日出城（ひじじょう）跡を訪れ、城下かれいを食べた際にあまりの美味しさに心を動かされて詠んだ句と伝えられています。この句の通り、日出城下は海底から真水が湧き出しているために、海水と淡水が混じり合う汽水となっています。海藻やプランクトンが豊富で魚が集まるので、この海域で獲れた鰈は大変に美味しく、特別に城下かれいの名が冠されています。余談になりますが、有名な琵琶湖を初めとする上質のしじみの産地にも汽水湖多いのも同じ理由ではないかと思っています。

鰈は江戸時代には殿様専用の魚とされ、庶民が食べたことが発覚すると罰せられたくらい希少な魚でした。藩の殿様はもちろんのこと、将軍家にも献上されたと言えばいかに珍重されたかがお解り頂けると思います。その味はエサが良いせいで、あくまで上品、他の鰈にありがちな臭みは一切ないと聞きます。ほとんど地元で消費されてしまうため、食べたことはおろか見たこともない魚ですが、一度機会を作って食べてみたいものです。

鰈の調理法は

鰈は淡白な白身魚なので料理法は多岐に渡ります。代表的な煮つけ、唐揚げ、刺身を初めとして、少量の日本酒をかけて塩を効かせて焼くのもまた鰈の進化を発見できるでしょう。

さてこの鰈、日本ではマコカレイの他にもマカレイ・メイタカレイ・アサバカレイ・ホシカレイ等々特徴ごとに分類されていますが、国によっては全く区別しないどころかフラットフィッシュ、平たい魚と呼んで鮃まで一緒にして考える文化があります。また、ぶり・かんぱち・ひらまさなどもひっくるめてイエローテール、菊色一尾としてひとまとめにしています。

この違いは古くから魚を食べる習慣が日本に根付いていただけとは思えません。日本人の繊細さが大きく影響していると考えたいのです。見た目の形だけではなく、食味もかなり違う種類の魚を区別しないなどは我々の先達は考えもしなかったでしょう。この繊細な食文化は是非とも後世に伝えて行きたいものです。柄にもなくそんなことを考えた初秋の午後でした。

（鈴木里山通信員）

編集後記

・今年もまたタイガーマスクこと伊達直人から施設の子たちにあげてほしいとてランドセルのプレゼントがありました。一番最初にこれを始めた人はこれほどまでに広まるとは思わなかったことでしょう。日本全国で伊達直人と名乗る人からの無償の提供は、昨年も報道されました。うれしいのはそれが誰なのかを自治体も詮索しないという暗黙の了解です。おそらく団塊の世代、定年を越えたあたりのサラリーマンかたたき上げの自営業の男の人で、決して金持ちというわけではなく、これまで真面目にコツコツと人生を歩んできた人ではないか、と勝手にプロファイリングしてみたりもしますが、自己満足であろうがなかろうが、いいニュースだと思います。

・牛久の友人に誘われて私も越後妻有の大地の芸術祭に行ってきました。牛久商店会主催の弾丸ツアーで朝5時出発。10時頃には十日町に到着しました。キナーレという美術館で一番感心したのはそこで販売されていた土産物のパッケージデザインの素晴らしさでした。ただのかりん糖がまったく別種の高級品に見えてしまうほどのもので、そこにおかれていた様々なものがデザインの力によって本当に魅力的な芸術品のように見えて欲しくなってしまいました。吟醸や大吟醸の酒も見たことのない容器に入って売られていました。味で勝負する市内のお菓子屋さんも、もう少しパッケージデザインにこだわったらもっと魅力的なものになるだろうと感じました。

・高滝神社のお祭りは今年は天気には恵まれませんでした。この神社のお祭りが済むと急に冷え込むようになり、年の瀬が近づいてくるような気がします。一年経つのは本当に早く、駆け足でおおみそかがやってきそうです。やり残したことがまだたくさんあり、時間はいくらあっても足りません。でも、これからの紅葉の季節を楽しむ余裕は持ちたいものです。

（征矢里山通信員）

紙面及び記事に関するご意見・お問い合わせは左記へ
市原商工会議所
0436（22）4305　担当：霜崎まで
Eメール　shimozaki@i-cci.or.jp

次回は1月25日(金)発行予定です。

房総・養老渓谷の地酒お土産は
養老渓谷駅前
角屋商店
養老渓谷観光協会窓口
市原市朝生原181
TEL0436－96－1108
FAX0436－96－0052

愛車のある幸せな暮らし応援します！
安全・安心
有限会社　全日本ロータスクラブ加盟店
小茶自動車
市原市石神227
TEL0436－96－0482
FAX0436－96－1293

皆様と共に歩む観光
親子で楽しもう
ワカサギ釣り！
高滝湖観光企業組合
TEL　0436-98-1277

里山からの発信

加茂のことをみんなで考えよう

かねてより加茂地区に具体的な要素があったら、自分たちの地域をもっと早くもっと適切に時代に即応したものに変えていけるのではないかと考えていました。この市原市はいかんせん広く、なかなか声が中央に届きにくいと感じていました。ある程度の自治権が与えられて自分たちで地域の問題を考え、地域に即応した対策を立てられたら事は進みやすいだろうと思います。

隣の大多喜町は城下町の利点を生かし小江戸の風情を残そうと町ぐるみで取り組んでいるし、今は本多忠勝を主人公にNHKの大河ドラマへの売り込みにも取り組んでいます。知っての通り、道の駅「たけゆらの里」の中身が繁盛は市原の道の駅「あずの里」を遥かに上回っています。睦沢町には地域の飲食店や商工業の店を紹介する冊子ができており、それぞれに解りやすい説明がつけられ、初めてその地に来た人間も行ってみようかという気にさせられます。又併によって消滅してしまった南房総の丸山町や隣の三芳村もシェークスピアの家とローズマリーの公園で名を売り、また農業をインに元気さを売りにしたりして小回りの利いた活動が目についています。加茂地区が加茂村という具体組織であったなら、この地に合った特質をもっと出せていたのではなかったかと思うこともありました。すべてを中央の市役所を通してことにあたらなければならない今は、加茂地区の人間が結果してことにあたるということができないままではないかと思えたからです。

ところが今年の8月4日に加茂地区全町会長了解の下に「加茂地区長期戦略ビジョン策定委員会」が立ち上げられました。来春には圏央道の南市原インターが完成し長南までが開通すること、そして再来年には南市原地域を対象としたアートミックスが開催されるという、正に節目の時にあること。これらの取り組みの一方で少子高齢化が進み、4つの小学校が閉校となり、有害鳥獣の増加による農作物被害と耕作放棄地の拡大が進むなどのマイナス要因が膨らんできていること。そうしたことを踏まえ、「こうした現状を前にする時、改めて加茂地区の目指すべき将来をこの地で共に暮らす多方面の皆さんとの議論を通じて、取り組むべき課題を明らかにしながら、あるべき将来の姿を描き、行政だけに頼らない取り組み手法を検討し、その実現に至る対応を体系立てる必要があります。もとより、どれだけの内容にまとめられるかは全く予想もつきません。しかしながら、今この取り組みに着手しなかったとしたら、間違いなく後の世の加茂の皆さんから『何故、あの時に皆で衆知を集めることを躊躇したのか？』と指弾されることでしょう。今の加茂地区は正にそうした状況にあるものと認識しております。」と決意の程が述べられています。

これはおそらく加茂村が市原市に合併されて以来初めて、加茂の人間が結集して加茂の現在と将来について考えを巡らし、問題解決への道を探り、実現に向けて取り組もうとする試みであろうと思います。

ところで養老町会では昨年度から「過疎の問題」「同居老人の問題」「鹿滝小跡地利用の問題」をそれぞれの委員会で検討するということが行われてきました。（現在はこれらを一緒にして養老未来研究会として活動しています）他の地域でも同じような取り組みが始まり、自分たちの地域の問題点をただ行政に訴えるのではなく、自分たちにできる小さな問題解決から始めていき、いろいろな知恵を結集していったら、そこに出て来るいろいろなアイデアを共有することができるようになると思います。オール加茂としてみんなでこの加茂のことを本気で考えるようになったら素晴らしい地域になるような気がします。加茂地区長期戦略ビジョン策定委員会もめざすところはそこにあると考えます。

過日、市原市教育委員会による廃校となる小学校跡地利用に関する委員会の説明会があります。多くの人間が集まったのに説明を含めて1時間と時間設定がされていたのは残念でおり、次回にこの問題について述べたいと思っています。短い質疑応答ながら、そこに参加した加茂地区の人間がそれぞれの地区の小学校に熱い思いを持ち、簡単に却下するようなことだけは絶対あってはならないという気持ちを強く抱いていることがひしひしと伝わってきました。オール加茂になれるかもしれないと感じた瞬間でした。

発想を転換する

ある時期学習塾で仕事をし、子供たちを教えていたことがあります。教えるという行為は実は一番学ぶ行為で、改めて学び直すいい機会でした。試しに誰かに何かを教えるということをしてみるとすぐわかることですが、人に教えるためには自分が本当に良く理解していなければできません。又、たまになぜそれを学ぶのかという本質に気付くこともありました。例えば算数や数学ですが、計算問題を一生懸命やるそのことが勉強というよりはトレーニングだということに気がつきました。スポーツのトレーニングと一緒だという何十回と繰り返し練習をしなければならないということです。たとえばサッカーのボールを相手にパスするということが頭でわかっていても、実際に蹴って相手の口と繰り返しちょうどいいパスを出すようになるには、とはたいていの人間が理解できます。野球でも毎日のようにノックを受けてキャッチする練習をするのは試合においてミスなくキャッチするためで、頭でわかっているからいいやなんて考える人間はいないでしょう。算数や数学も基本的な原理を理解してもそれを自在に使うためには繰り返し練習する必要があります。足し算、引き算、かけ算、割り算といった基本的な計算方式の原理を理解することと、それを使えるということは別な話で、使えるようになるためにはトレーニングが必要です。ですから文章問題だけが応用問題のように数えられがちですが、算数や数学の計算式も含めてすべての問題が実は応用問題だということにこの時気がつきました。又、数学の証明問題もこれが数学かと初めて接した時に感じた人も多いでしょうし、戸惑いを覚えた人もいるでしょう。でもこれは1たす1が2であるという、絶対に正しいことを積み重ねていって結論を導く、ものの考え方の練習であるということに気が付きました。ABCは全く同じである。だったらABCとは全く同じである。といった一番単純な方法も含めて全く正しいことを積み重ねていって誰もが納得する結論に至るということで、これはまさに推理小説の犯人を当てるのに似ています。なぜその人間が犯人なのか、その結論を得るために一つずつ間違いではないことを積み重ねていかなければなりません。「人間は考える葦である」ということを説得力を持って説明するためには、みんなが納得することを積み重ねていって説明するしかないのです。みんなが納得することを積み重ねていって説明するということがつまり証明であって、証明問題のトレーニングこそは考える方法の練習にほかならないのではないかということです。これも教えていて初めて気が付いたことでした。数学を学ぶことの本質がものを考える方法の取得とその訓練にあると思えるようになりました。自分の中のそれ迄のイメージが転換されてから算数や数学を学ぶことの意味がよく理解できるようになりました。もちろん子供たちにもそのことは伝えました。何のために学ぶのかということの理解があれば学習の意欲は変わってきます。この何のために学ぶのかという一番肝心なことにもっと時間を割いて子供たちに教えることができれば、子供たちも変わってくると思います。

発想の転換があるとものがよく見えてくることがあります。今ではもう誰も信じませんが、事故が起こる以前「原発は絶対に安全である」と盛んに言っていた関係者や学者がいました。そんな時に「ぜったいに安全であるのならば最大の消費地である東京都の真ん中に原発を作ればいい。送電のコストも下がりもロスもなくなり一番いいはずである」と、数学的な論理で「絶対に安全である」という前提を崩したのが今から33年前に出版された「東京に原発を！」という本でした。実際に火力発電所は大都市近辺にいくらでもあるのに原子力発電所は関西用は北陸に、東京用は福島に造られています。そして最も懸念される核廃棄物の処理施設は青森県のバラ所村です。とすれば、絶対安全ではないと解っていたのは「絶対に安全である」と言って進めていた人たちではないかと思います。

（従生里山通信員）

里山の保存食　栗の渋皮煮

材料（作りやすい分量）

栗	1Kg
重曹	大さじ1
砂糖	500g～700g
みりん	100cc
しょう油	大さじ2

（1）栗は沸騰した湯にしばらくおく。少しずつ鍋から取出し、鬼皮をむく。こうすることで皮が柔らかになりむきやすくなる。（渋皮に傷をつけないように剥く）

（2）鍋に栗を入れ火にかける。沸騰後中火にして15分茹でる。

（3）栗を水にとり、筋をていねいにとる。再び水から茹でる。（20分）湯が赤黒くなるまで2、3回繰り返す。

（3）水2カップに砂糖500gを入れシロップを作り栗を入れ、15分静かに煮る。シロップに栗が浸るようにクッキングペーパーを乗せ一晩漬けておく。

（4）栗を取出し煮汁をみりんを入れてひと煮立ちさせる。（味を見て砂糖を加える）栗を入れしょうゆを落とし5分程静かに煮る。

（大曽根R里山通信員）

市原アートミックス開催決定！

市制50周年事業として計画されている芸術祭の概要が決まりました。名称は『市原経国際堅苦芸術祭　市原アート×ミックス』に正式決定。開催期間は平成26年3月21日～5月11日までの52日間。牛久駅を玄関口として、田尾にできる圏央道「市原鶴舞インターチェンジ」（※名称は未定）周辺と小湊鉄道の里見駅から養老渓谷駅一帯をスイン会場として、約40の作品とイベントが展開される予定です。

中心施設は鹿渕湖にあると彫刻の丘となります。芸術家と多くのサポーター、地域住民が一体になった取り組みで、南市原が「首都圏のオアシス」となるような成果が期待されています。行政では52日間の期間中に20万人の来場者と30億円を超える経済効果を予想していますが、同じような取り組みをしている新潟県越後妻有や瀬戸内を見ると、50万人を越える来場者となっても不思議ではありません。

芸術祭の取り組みとして、▼地域資源を発掘して資産とする▼地域の生活文化を生かす▼地域、世代、ジャンルを超えた人々が連携する▼次代を担うアーティストが参画する▼新しい郊外型観光を提案する▼持続可能なイベントとして継続する。という6つの方針が示されています。地域の活性化に「他所者」「若者」「バカ者」が必要だとよく言われますが、多くの若者がサポーターとして手伝いに加わり、外国の芸術家までが参加して、地域の皆さんと作り上げる芸術祭が3年ごと開催される事になっていますので、この芸術祭を地域再生のチャンスと捉えて、まず参加してみたいかがでしょうか。

（大曽根R里山通信員）

大地の芸術祭見聞記

今年の暑い夏の盛りに新潟県十日町周辺で開催された大地の芸術祭というアートイベントがありました。市原市が市制50周年を記念して芸術祭を開催するモデルケースとなっている新潟県十日町市に視察に行ってきました。大地の芸術祭は2000年にスタートし、3年に一度のペースで今年は3回目、7月29日～9月17日まで51日間、開催されていました。今年の来場者数は延べ45万人になり、回を重ねるごとに増加しています。東京から300㎞以上離れた過疎地帯に、わずか二ヶ月足らずで45万人も集まるのです。駐車場に停めてある車のナンバーを見ても東京、千葉、名古屋と本当に全国各地から集まって来ていることがわかります。中でもやはり都内のナンバーが多く、関越道を軽自動車でうンならかして走ってきた感覚もいました。

この大地の芸術祭は都会の人ほど好むであろうイベントでしょう。どこか懐かしい田園風景の中にアートがあり、里山、廃校、古民家、美術館などを活用し、気さくな地元のオジサンが案内をしてくれる。この案内をしてくれるオジサンだったお姉さんだったりするボランティアスタッフの皆さんが「本気」だったことに驚きました。仕事柄、ボランティアで仕事をお願いすることが多々ある私にとっては衝撃的でした。ボランティアの方を「本気」にさせるのは本当に難しく、ヤル気を削がないよう扱いもデリケートです。

あるアート作品を見学した時に農家のオジサンらしき人が、暑い中一生懸命に作品について説明してくれました。また、ある別の作品を見学していると「今日は暑いねえ。塩はかけるかい」と冷えたスイカを切ってくれたオジサンもいました。私は気になったので思わず聞いてみました。「どうして皆さんはこんな親切で一生懸命なんでしょうか」オジサンは少し照れながら答えてくれました。「正直、芸術とかよくわかんないけどさ、ここ（越後妻有）がすごいね、素晴らしいねって言われるのは嬉しいからさ。だから手伝って幸いなことに市原市加茂地区には田んぼ、里山、廃校、古民家、美術館すべて揃っており、加えてローカル列車まで走っています。市原市でも本気を見せてやりましょう。

（霜崎里山通信員）

古民家で語り　古民家に舞う

養老川ぼりに行ったら約450年の民家ギャラリー・『アートハウスあそうばらの谷』で開催されていた『ユカリウム　紅の家』の『語り部と音舞台』と題されたイベントに9月22日秋分の日に行ってきました。遠山あきさんの養老渓谷の今昔語り。94年を過ごしてきた年月がゆっくりと語られ、まるでタイムマシン続いての音舞台は数々の民族楽器　鈴の音や太鼓、アコーデオンの奏でる音楽と共に表現者「ユカリウム」が登場し、古民家に住む精霊と一緒に生命の源やそれ香るもの（空・大地・風）を讃え力強い舞台となりました。会場に飾られた『ホいぐるぐる』シリーズは市原の稲穂を使い自作と筆で描いたものです。語りべと、音舞台『古民家と一体化して独特の雰囲気がありました。

（大曽根R里山通信員）

第七回町会紹介　国本町会　防災訓練を実施する

町会紹介の代わりに、町会の今を知ってもらうために、9月2日（日）に行われた第一回国本町会自主防災会防災訓練の報告をします。

訓練当日は雨模様にも関わらず、自主防災会に登録されている総数132名のうち、51名が国本会館に集い、訓練を実施することができました。これだけの老若男女が集まったのは、今までにはなかったのではないか？！という声も聞かれました。防災に関する意識が高まっていることがうかがわれます。8時45分よりの1人間行動訓練（安否の確保）から始まり、情報伝達訓練（安否の確認訓練）、炊き出し訓練、情報伝達訓練（安否の確認訓練）、炊き出し訓練、情報に対する説明、備品の説明と操作方法、消火訓練と、役員の皆さんの熱心な取り組みと説明により、スムーズに分かりやすく進行することができました。町会の皆さんの眼も真剣そのものでした。

報告書には当日の様子を何枚もの写真に収めたものを掲載しました。今回の取り組みが大変実のあるものになったことを、それらの皆さんの写真から感じ取ることができると思います。来年度は更に充実した訓練とするために、参加していただいた皆さんの意見を参考にしたいと考えています。半日ではありましたが、皆さんの協力があって初めて成しえたことです。心から感謝したいと思います。

（兼岡栄夫里山通信員）

フィンランドからの理想の住まい、ホンカログホーム
モデルハウス公開中！
断熱効果が高く、身体に優しい家を体感してみませんか？
◆ギャラリー情報◆
11月21(水)～26日(月)　陶芸・鉄工芸作品
11月30(金)12月1日(土)カントリードール展
開館時間 10:00～17:00

HONKA
www.honka.com　Today's homes. Naturally.
ホンカ房総　太陽工業株式会社 ログホーム事業部
TEL0436-95-5641　FAX0436-95-5642　http://www.honka-bouso.com

人と環境が一体となって大切な未来へ
自然環境と人間との調和を目指して
杉田建材株式会社
本　社　市原市万田野 26　TEL 0436(96)1311
市原支店　市原市惣社1－1－22　TEL 0436(24)0511
南総支店　市原市牛久450－1　TEL 0436(50)0111
URL http://www.sugita-group.com/